サラとアミィはかく語りき

志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サラとアミィはかく語りき

【Ｎコード】
Ｎ１７３５Ｂ

【作者名】
志信

【あらすじ】
街を見下ろす小山の奥に、武術家が一人、少女が二人。ケンカは強いが頭の悪い少女アミィと優しくて気配り上手だがキレやすい少女のサラの物語。一話完結形式を取っています。

彼氏のできない彼女

「ただいまー」
言いながらアミィは自宅のドアを開けた。
ボロだが二階建ての山小屋だ。養母であり師匠である武術家が人間嫌いのため
おのずとアミィも人里離れた山奥に住むことになっているが、あまり不便に思ったことはない。
物心つく前からこんな生活だったし、別に街が遠いわけでもないからだ。

「おかえり」
「おかえりー。早いね」
靴の泥を落としてリビングに顔を出すと、母と妹弟子が三時のおやつを食べている。
テーブルの上にあるケーキを一瞥していそいそと席につくアミィ。
「サラ、あたしの食器出してよ」
「はいはい」
妹弟子――サラが苦笑しながら食器棚を開けた。
整然と並ぶ木製の食器から手際良く自分達の使っていたのと同じ皿とフォークを取り出し、アミィの前に置く。
アミィはと言えば、すでに果物ナイフに手を伸ばして
四分の一ほどが欠けた苺のショートケーキをざくざくと取り分けていた。
右手のナイフでケーキを切った後、わざわざナイフを置いて右手で皿を寄せ、もう一度ナイフを右手に取ってケーキを持ち上げる。
「自分で用意しろ、食器くらい」
「いいじゃんか、サラが嫌だって言わないんだから」

母――綾子の指摘もどこ吹く風と、アミィは木目のある皿にケーキを乗せた。
全ての作業を右手で行ったのは、アミィが左腕を持っていないからだ。
とある事故で失われた彼女の左腕は、現在では義手になっている。
肘はあるのだが、手首やその先はない。
ギプスのように包帯でぐるぐる巻きにされているのは、その物騒な外観を他人の目から隠すためであった。
それが返って悪目立ちするということに、彼女は気付いていなかったりする。

「そんなこと言ってると、いずれサラに愛想をつかされるぞ」
「ないない、絶対ない。ねえ、サラ？」
「んー、さっきみたく言われたら、嫌いになっちゃうかもなあ」
意地悪く笑いながらも、サラはかいがいしくアミィの分の紅茶をカップに注いでいる。
「ちょっと待ちなって、サラがいなくなったらあたしゃ誰に面倒見てもらえばいいのさ。
お袋と二人暮らしなんて嫌だよ」
「こっちから願い下げだ。逆ならまだしも、一生娘の面倒を見る母がどこにいる。
まったく、左腕の一本や二本ないくらいで」
「ほら、こんな薄情なお袋なんだから。サラがいないと」
「冗談だよ、そんな必死にならなくても。はい、お茶」
「おお」
アミィにカップを差し出し、自分のものにも中身を注ぎ足していたサラは
片手で砂糖とミルクのビンを手繰り寄せながら言った。
「別に私じゃなくても、彼氏さんと結婚して面倒見てもらえばいいじゃない。

今日、彼氏さんと遊んで来るんじゃなかったの？」
「あー、振っちゃった」
「は？」
二人の沈黙を意図せずに無視し、アミィはぱくりとケーキを頬張った。
しばらくして我に返ったサラが慌てて問い質す。アミィにまた彼氏ができたと聞いたのは、ほんの数週間前なのだ。
「え、だって、この間付き合い始めたばっかだって」
「そうだけど。それとこれとは関係ないだろ？どうも気に入らなくてねえ」
「何？嫌な人だったの？」
「ああ、いけ好かない奴だった。料理が得意って言うから、食べてみたんだけどさ。言うほどのものでもなくて」
「……それで、振ったの？」
頷くアミィ。サラはしばし絶句した後、呆れたように額に手を当てた。
「あみー……そのくらい我慢しないと」
「なんでさ。それより時間できたから、今から街まで遊びに行かないかい？」
アミィは笑顔でそう提案する。船をこいでいたサラがうつろな目を師である綾子に向けると
綾子もまた疲れたような表情で面倒くさそうに手を振っていた。「行ってこい」というジェスチャーだろう。
「……わかったよ。それじゃ、いこっか」
サラがぬるんだ紅茶を一息に飲んだ。アミィが嬉しそうに頷き、皿のケーキを強引に口に押し込む。

「まあ、アミィの気晴らしだしね……」

チキンナゲットが食べたいという辛党サラの主張と
ソフトクリームが食べたいという甘党アミィの主張が真っ向からぶつかり合った結果、
サラが譲歩する形でソフトクリームを食べることとなった。

二人は人の少なくなったオープンカフェの一角に陣取り、冷たいクリームを舐めつつ往来を眺めている。
アミィは黒いレオタードの上から赤い着物を羽織って
腰を太いベルトで締めていたが、下半身には何も着ていない。ミニスカートのような着物である。
肉感的な大腿部を惜しげもなく外気にさらし、着物の左袖も肩から切り落とし、義手を隠すための白い包帯も完全に露出させていた。
ちなみにサラは灰色の布ズボンに黒いシャツ、上着に青い革ジャンパーと
素肌を見せない普通の格好をしている。派手な身なりを好むアミィとは対照的に、サラは服装の趣味が地味だった。

中ほどまでクリームを減らし、どのタイミングでコーンをかじるかを考えていたサラに
「……あのさ」
何の前触れもなくかけられたアミィの声。やや驚きつつもサラが顔を上げる。アミィはサラのほうを見ていなかった。
「何？」
「さっき家でさ、『そのくらい我慢しなきゃ』って言っただろ？」
「うん、言ったよ」
「彼氏が自分の理想通りでなかったら、我慢しなきゃ駄目かい？」
アミィは至極真面目な口調でそう言った。内心ではずっこけながらも、サラは頷いた。
「そりゃそうだよ、自分の理想にぴったりはまる男の人なんて、そうはいないんだから。

アミィ、理想高いんじゃない？」
「そうかねえ……？」
「じゃあ、どんな人がいいの？」
サラが逆に問い返すと、アミィはようやく向き直って考え始めた。
包帯で真っ白になった左腕を頬に当て、どこか楽しそうに条件を並べていく。
「あたしより強い人のほうがいいけど……まあ、そこはどうでもいいよ。あたしは強いからな」
「まあ、アミィより強いとなると、精霊使いか何かだろうね。で、他には？」
「そうだねえ……料理は上手でないと嫌だ。あたし、料理できないもん」
「なるほど」
「身長は別に低くても構わないし、顔だってよっぽど悪くなきゃ目をつむるよ。でもデブは嫌だ」
「性格とかは？」
「優しいのが第一。あたしがワガママ言っても笑って聞いてくれるような人がいい。
でもそれだけじゃなく、ちゃんと叱るときは叱ってくれなきゃ駄目だね。
手の中で遊ばせてくれるような人って言うかさ。そんな感じ」
「じゃあ、総合しようか。アミィより強くて、料理が上手で、顔が平均以上で、太ってなくて、
優しさの中に厳しさを持った、包容力のある男の人がいいんだね？」
「そうなるね」
「そっか。アミィ、一生彼氏できないと思ってたほうがいいよ」
「え、なんで！？」
真正面から切って捨てられ、あたふたと両腕をばたつかせるアミィ。
サラがため息をつく。

「理想高すぎ。まさかここまでとは思わなかったよ……
そんな男、いるはずないでしょ」
「えー……いないのかい？」
「絶対にいない。賭けてもいいよ。アミィ、少しは妥協を覚えなきゃ」
「何だと。お袋が言ってるだろ、妥協はいかんと」
「それとこれとは話が別だよ」
サラが諭すように頷くが、アミィは不服そうに腕を組み、唇を尖らすだけだった。
「そうかねえ……いる気がするんだけど」
「何でそう思うの」
「……それを言われると痛い」
「妄想だよ、妄想。現実見なって。ほら、早く食べて遊びに行こう。
カジノで賭けレスリングやるはずだから」
「お、それは見に行かないとな」
魅力的な提案に話の前後を忘れ、かぶりつくようにクリームを口に入れ始めたアミィ。
そんな姉弟子の年上らしくない様子を見ていたサラが
半ばまで食べ終えたコーンを一気に口に放り込んでからつぶやいた。
「寂しくないの？」
「へ？」
「彼氏、何で振ったんだっけ」
「料理が下手だったから」
「その前の彼氏は？」
「仕事の都合であんまり会えなかったから」
「その前は」
「何の劇を観るかで喧嘩になったから」
「……そんなに彼氏作っては振ってを繰り返して、寂しくないかって」
「ないねえ。何でだろ？」

「聞かないでよ」

どかあっ！

相手の腰に抱き付き、持ち上げて、自ら前方に倒れ込むようにしてダウンを奪う。
赤い衣装のレスラーが青い衣装のレスラーの両肩を床に押し付けた、すかさずカウントを取り始める審判。
「1、2、3っ！」
青いレスラーの抵抗空しく3カウントが取られ、赤いレスラーの勝利が決定した。歓声と罵声が同じだけ響く。
「あー……負けやがった」
アミィが舌打ちする。

サラやアミィのような十代後半の少女が立ち入るような場所ではない地下カジノだが
どちらかといえば田舎のこの街は娯楽が少ないから仕方がない。店内を見ると、同じくらいの年頃の子供達もちらほら見えた。
華やかな中に緊張感を秘めた独特の雰囲気の中、アミィは人込みをすり抜けてスロットマシンのコーナーに向かう。
「サラー、コインちょうだい」
「はいはい」
端から二番目の台に陣取っていたサラが、アミィのほうを見もせずにカップを渡す。コインが満載されていた。
サラの足元にはコインの山と盛られたカップが何個か置いてあった。
サラの台はなかなか出ているようだ。
「さんきゅ。さすがだねえ」
「まーね。そっちはどう？」

「全然ダメ。まあ、サラがこうだからとんとんかも知れないけどさ」
アミィが笑う。サラも笑い返しながら、向かって左から順にボタンを押していった。さくらんぼの絵柄が横一直線に並ぶ。
「この店、儲ける気がないんじゃないかい？」
「そんなことないよ、攻略には苦労したんだから……よ、は、と」
台に数枚のコインを食わせてレバーを引き、リールを回すサラ。
ぽち、ぽち、ぽちと丸い突起を押していけば、今度はベルの絵柄が斜めに揃った。
「あとは自分で頑張りなよ。あと十回やったら今日はやめるからね」
「ブラックリストに載ったら稼げなくなるもんねえ。了解」
アミィは人差し指と中指で軽く敬礼し、再び賭けレスリングに向かった。
周囲の床より高くなったステージに正方形の線を引いた試合場では、ひいきのレスラーがウォーミングアップを行っている。
コインカップを抱える腕に力が入った。無意識に小走りになっていたアミィの肩を、唐突な衝撃が襲う。

どんっ。

「おわっ……とっ、ととと、とっ」
手からこぼれ落ちそうになったコインを、うなぎでも捕まえるように宙でキャッチするアミィ。
義手と手の間に挟まれて落ち付いたカップを見て息をつき、振り向く。人がぶつかったに違いなかった。
「悪いね、大丈夫かい？」
言おうとして、言うより早く胸倉を掴まれた。
思わずぱちくりさせたアミィの目には黒髪を短く刈り込んだ男が映っている。
「悪いね、で済む人に見えるか？嬢ちゃん」
「見えないねえ」

アミィは皮肉っぽい微笑を浮かべながら、それとなく男を観察し始めた。
大柄でがっしりした男の顔にはあちらこちらに傷があり、豪勢な造りの革の鎧を着込んでいる。
武器はベルトに取り付けられた剣が一振り。さして長いものでも、精霊の加護を受けたものでもなさそうだ。
「ふざけてんのか？」
凄みを効かせてきた男の不細工面を間近に見せつけられ、アミィの笑みがいよいよ濃くなった。
「そっちこそ、喧嘩を売る相手を間違えたね！」
アミィがぱちんと右腕で男の手を払いのけたかと思えば、

――がしいいいっ！！

痛烈な左の前蹴りが男の顎に炸裂した。
バレリーナもかくやという柔軟性を発揮して振り上げられたアミィの足が
頭一つ大きな男の体を軽々と持ち上げ、脳天から天井に叩き付ける。
説明するまでもなく、常人離れした力だ。
「……いくらなんでも予想外だねえ、一発でくたばるとは思わなかったよ」
べしゃっ、と力なく倒れた男を蹴飛ばしてカジノの隅に追いやる頃には、
アミィをカジノのガードマン達が取り囲んでいた。今さっき倒した男と格好が似ている。同業者なのだろう。
田舎のカジノに雇われている者達である。ガードマンとは言っても、ヤクザ屋とたいして差のない連中だった。
「てめえ、何やってんだ！」
「別に？　このあたしの悩殺ボディに失神しちゃったみたいだねえ、そこの兄ちゃん」

思い切りふざけきった口調で男を指し示し、腕を頭の後ろで組んで悩ましく腰を振るアミィ。
まだまだ子供の顔立ちとは裏腹に発達しきった今が旬の肢体、ストライクゾーンど真ん中の人間も多いだろうが
たとえ男達がそういう趣味であったとしても、状況を打破する決め手にするにはまだ甘い。
そして打破してしまっても困るのだ。彼女にとって、喧嘩は屈指のストレス解消法である。
アミィの自分達を見下した物言いに怒り狂い、四方から飛びかかる男達。アミィの目が楽しそうに輝いた。
「恨むんじゃないよ！」

ひゅ――ごぎゃんっ！！

その刹那、アミィの左右にいた男がきりもみしながら後方に飛び、それぞれスロットマシーンとルーレット台を滅茶苦茶にした。
両腕――正確には右腕一本――を前について逆立ちすると同時に恥ずかしげもなく開脚、
ブレイクダンスのウインドミルにも似た動きで顔面を蹴り抜いたのである。
「二人！」
次いで背中を丸めてころりと回転、でんぐり返しで正面の男に近寄るとハンドスプリング、
揃えた足を思い切り跳ね上げて下からみぞおちを貫く。
「三人っ！はい、お次ー！」
胃の内容物を吐き出す男を尻目に、アミィは釣り竿のようにしなる蹴りで次々と男達をノックアウトしていった。
「六っ、七っ、八っ、九、十、十一、十二っ！」
数秒もしないうちに、アミィを取り囲んだ男達の人数はわずか数人になってしまっていた。

右の拳を開いたり閉じたりしながら不敵に笑うアミィの実力を目の当たりにし、積極的な攻撃に踏み切れずにいる。
「……どうしたよ、来ないんなら」
アミィは深く腰を落とした。男達とは少なからず距離があったが、彼女の運動神経を持ってすれば一息で詰められる間合いだ。
「こっちから――ほぐっ！？」

びったあああんっ！！

走り出そうとしたアミィは、何故だか顔面に物凄い衝撃を感じた。目の前が暗転し、意識が遠のいていく。

「……あー、はい、どうも、お騒がせしました」
アミィが走ろうと体を傾ける――すなわち、バランスが一時的に崩れる一瞬を狙って足を払い
彼女を見事に転ばせてみせたサラは、周囲の男達や見物客にぺこぺこと頭を下げ、
皆が我にかえる前にアミィを抱えると、一目散にその場を去ってしまった。

カジノには、あっけに取られたガードマンと客達が残される。

十数分後。街の数少ない公園に、サラとアミィの姿はあった。
「だから！ケンカ売ってきたのは向こうなんだよ！あたしは何もしてないったら！
　なのになんで――」
「言い訳しない！」

サラはアミィの鼻先に指を突きつけて続ける。
「あんな騒ぎになったらどうなるか、予想つかないの？
カジノには少なからず悪い人達の思惑が絡んでるんだから、
そこのガードマンに恨まれるような真似したらまずいでしょ」
「だったらどうすれば良かったのさ！？」
「誰かに助けを求めるとか、一目散に逃げちゃうとか。いろいろ方法はあったでしょ」
「そ、そんなの、情けないじゃ――」
「うっかり裏社会に目をつけられて、コンクリートで固められて海に沈められたりしたら
それこそ情けないじゃない。目の前の利害に固執しない、常に大局を見据えろ。お師さんが言ってるよね？」
「め、目の前に戦いがあるんだよ！？それから逃げるのはぁ――」
「どうしても戦いたいならそれでもいいよ、それにしたって場所を変えたりはできるでしょう。
カジノのど真ん中で戦ったりしたら、他の一般人にも見られるんだよ。面子が立たないでしょ、ヤクザ屋さんも」
「っ……うぅ～～～っ」
実際にはアミィのほうが一つ年上なのだが、他者の目にはどうやってもサラが姉に映るだろう。
子供を諭すような言い方をされ、アミィは真っ赤になってむくれ、何かを言おうとして何も思い付かず、結局、
「……ごめんなさい。もうしません」
そう言ってうなだれた。唇を尖らせるアミィの頭をげんこつで優しく小突き、サラは笑って言う。
「はい、よろしい。荷物持ちくらいで許してあげるよ、夕飯の買い物でもして帰ろうか」
「わかった。……メニューはなんだい？」
「決めてないよ、何がいい？」
「シチュー希望」

即答するアミィ。サラは頷き、ふと思い出したように言った。
「ちょっと待ってて、トイレ行ってくる」
「ん？　おお」

公園すみの小さな建物に歩いていくサラの背中を見送っているアミィの肩に
ごつごつと荒れた男の手がかけられた。
アミィは振り向き、軽く顔をしかめる。背後には顔のあちこちに湿布を貼った、先ほどのガードマンがいた。

「――わざわざリターンマッチを挑んでくるとはねえ。わざわざこんな場所まで用意してさ」
アミィは臆した様子もなく言った。

彼女が連れてこられたのは街の路地裏だ。
広さは武術の試合場に使うにはやや狭い程度。四方を背の高い建物に囲まれており、
出るには入口を逆行するしかない。そこはガードマンに塞がれていた。
「さっきのことでこりなかったのかい？　私に勝てる奴なんか一人だっていなかったじゃないか」
「ああ、あそこにはな」
アミィに派手にやられたガードマンが不敵につぶやく。
すると、図ったようにアミィの前に一人の男が進み出た。ひょろひょろと背の高い、青白い肌をした不健康な男だ。

「ふーん？　こいつがあんたらのリベンジをするってわけだね」
「威勢のいい娘だな。あまり調子に乗ってると、後悔することになるぞ？」
「その台詞はヒロインに負ける奴が吐くって相場が決まってるのさ。言い直すなら待ってあげるよ」
アミィが腰を落とし、かかとで地面をリズミカルに踏み鳴らし始めた。
痩せた男も構えを取る。武器らしい武器は持っていなかったが、彼の構えはやけに素人くさい。
武術の心得があるわけではなさそうだ。単なる素人のケンカ自慢――アミィは男の実力をそう読んだ。
「アマリネ・フジバヤシ。覚えときな、あんたの思い上がりを粉々にする美少女の名前さ」
「俺の名はバーゼルだ。台詞はそっくりそのまま返そうか」
「上等ッ！」
アミィの靴底が砂煙を上げた。

「ごめん、意外と込んでて――って、あれ？」
アミィはそこにはいなかった。サラはきょろきょろと辺りを見渡し、近くにいた屋台の店主に声をかけた。
「あの、この辺にいた女の子を知りませんか？　背は私と同じくらいで
丈がミニスカート並に短い赤い着物を着た、長髪の子なんですけど」
アミィの派手な格好は聞き込みには便利だ。店主はすぐに頷き、公園の外を指差す。
「ああ、その子なら何か、ガラの悪い男に連れて行かれたよ。
少し笑ってたようにも見えたから放っておいたんだけど……騎士

団にでも通報しようか？」
「……いえ、大丈夫です、知り合いですから。ありがとうございます」
サラは人あたりのいい笑みを浮かべ、駆け足で屋台を後にした。

もとから湿っていた陽の当たらない土をさらに濡らしたのは、痛みからあふれるアミィの涙だった。
よろよろと起き上がる彼女の前には、痩せた男――バーゼルの涼しい顔がある。
あちこちにすり傷やあざがあったものの、アミィの惨状に比べればかすり傷にも等しい軽い怪我だ。
ガードマン達は面白そうに二人の勝負――否、半ば一方的な暴力行為に口笛を吹いている。
「くそっ……」
力の抜け始めた足を叱咤し、アミィは何度目かもわからない攻撃を開始した。
軽く飛び上がり、上半身を攻めていくと見せかけて屈み込むと弁慶の泣き所とも称される人体急所――向こう脛に全力で靴裏を叩き付ける。

がしいっ！

この個所を通っている神経のすぐ下には骨があり、ここを蹴られれば大の大人も涙を流して痛がらずにはいられない。
そう、痛がらずにはいられないはずなのだ。しかしバーゼルは少しも表情を変えなかった。
「――ちっ！」
蹴りを放った右足が脳に伝える、半端でない衝撃。

巨木や石を蹴ったという騒ぎではない。鉄柱にぶつけたような痺れが右足を走っている。
舌打ちまじりにアミィは左腕を振りかぶると、水平に薙いでバーゼルの胸元へと無造作に叩き付けた。
アミィの義手は鋼鉄製だ、まともに受ければ骨折は免れない一撃だったが――

ぎぃぃぃんっ！！

包帯を巻きつけた左腕は金属音とともに弾き返された。
信じられないことだった。アミィの腕とバーゼルの胸との間に、分厚い金属の板が挟まっている。
「さっきの威勢はどうした、アマリネとやら」
頬に手加減のない拳を叩き込まれ、アミィはふらふらと尻餅をつく。
涙にかすむ視界の中心で、浮遊していた金属の板は溶けるように消えてなくなった。

この世界には、精霊使いと言う人種が存在する。
平たく言えば魔法使いだ。万物に宿るとされる意志『精霊』を使役しおおよそ常人には不可能な奇跡を起こしてみせる。
持って生まれてこなかった者はどんなに努力をしても得ることができないこの先天的な才能を
たいていの精霊使いは世のため人のために活かすのだが、時にバーゼルのような、悪行に力を使う精霊使いも少なからず存在する。
それも当然と言えば当然である。
『精霊使いを殺す手段が一つだけある。それは精霊使いに殺させることだ』という言葉があるほど、精霊使いは強い。
その力を利用しようとする悪人は多く、その力を売り物にする精霊使いも多いのだ。
アミィとて並の格闘家ではない。多少のハンデなら跳ね返せるだろ

う。しかし今回ばかりは相手が悪かった。

「精霊魔法『アイアン・スキン』。俺は俺の魔法にこう名付けた」
バーゼルは顔の前に手をかざして言った。その手は黒光りする金属に覆われている。
「俺は俺の意志で、体を鋼鉄で覆うことができる。つまり、どれほど力持ちの人間であろうと
単純な打撃で俺の体を傷つけることはできない」
「アイアン・スキン――鋼鉄の肌ってか。……あんた、ネーミングセンスないねえ」
アミィは皮肉っぽくつぶやいたが、それが強がりであることは誰の目にも明らかだった。彼の言葉が事実なら
彼は全身に分厚い鎧を着込んで戦っているも同然であり、
殴るか蹴るか投げるかしか攻撃の手段がないアミィには最悪の相手となる。分が悪すぎた。

「口の減らない娘だな。自分がどんな状況に置かれているかわかってないと見える」
「わかってるともさ。こっから逆転したらカッコいいよねえ、あたし」
おぼつかない足取りで再び立とうとするアミィだったが、先ほどのパンチが尾を引いているらしく
平衡感覚を乱され、まともにバランスを取ることができないでいた。地面が船のように揺れている。
バーゼルが何もせずとも足を絡ませ、酔っ払いのように倒れるアミィ。

そんな彼女を、優しく抱き止める者がいた。

「……何？」
バーゼルが片方の眉を跳ね上げる。
アミィの腰に後ろから手を回すようにして、サラがその体を支えていた。
末恐ろしいまでの無表情で、じっとバーゼルを見つめている。
バーゼルがちらりと出入り口を見れば、見張りのガードマンは二人とも倒されていた。
「何だ、お前は」
「サラ・マローコモンと言います。アミィの――アマリネ・フジバヤシの妹弟子です」
苦しげに自分の名前をつぶやく姉弟子を足元に座らせ、サラは淡々と自己紹介した。
「そうか。この娘を助けに来たと、そういうわけだな？」
「そうなりますね。連れて帰ってもいいですか？けっこうひどい怪我みたいなので」
「そんな勝手が通ると思うか？」
バーゼルは鼻で笑う。周囲のガードマンが、倒された二人を気にかけつつもはやし立てた。
サラは不機嫌そうな無表情を崩さず、落ち付いた口調で聞いた。
「では、どうすれば良いですか？」
「力ずくでどうにかすればいいだろう？　俺達に体を売るって言うなら、話は別だがな」
「そうですか」

つかつかと歩み寄り、サラはゆるりと右手を突き出す。
とくに拳を放ったというわけではないようだったが、バーゼルは反射的に胸を守る金属の鎧を呼んでいた。
彼の精霊魔法――アイアン・スキンが薄い胸板を覆い、サラの手の平に硬く冷たい感触を伝える。
サラが右手でバーゼルの胸を押すような姿勢になっていた。

「……精霊魔法ですか」
「そうだ。俺のアイアン・スキンがある限り、素手では俺を倒すことなどできない」
ずっと冷静な姿勢を崩さない少女の絶望する姿を想像してか、勝ち誇ったような笑みを浮かべたバーゼルだったが
その予想に反して、サラは少しも取り乱さなかった。右手をバーゼルの左胸に押し当てたまま言う。
「お名前を聞いても良いですか？」
「バーゼルだが」
「では、バーゼルさん。一つ忠告しておきます」

ずどんっ。

次の瞬間、バーゼルの口が大量の血液を吐き出した。
それを浴びることを嫌ってかサラが少しだけ右に立ち位置を変え、バーゼルはうつ伏せに倒れ込む。
彼の左胸にはわずかな光を取り込み、複雑に屈折させて輝く美しい槍が突き刺さっていた。バーゼル自慢のアイアン・スキンを貫いてだ。
「世の中には金属より硬いものがたくさんあるんです」
カットされたダイアモンドのように光を乱反射する刃を右手の掌から呼び出し、一人の男の生きる権利を剥奪してみせた少女は
頬にわずかに散ったバーゼルの血液を拭い取り、呆然としているアミィに手を差し出した。

「立てる？」
「あ……ああ。大丈夫」
サラの肩を借りてどうにか立ち上がるアミィ。無表情はようやく氷解し、サラが柔らかな笑顔を見せた。
そのまま無言で立ち去ろうとする二人を、慌てて残りのガードマン

が取り囲む。
「ま、待て！　てめえ、バーゼルさんに何したんだ！？」
「殺しました」
涼しい顔でサラはバーゼルだった死体を指差す。
その胸に突き刺さっていたはずの刃はきれいさっぱり消え去り、傷口からは血が飽きることなく溢れ出しているだけだ。
「お仕事ご苦労様です。でも、ここは譲って頂けませんか？」
サラは抑揚のない声で続けた。隣のアミィが肌を粟立てるほどの冷たい声だった。
「そして、二度と私達の前に現れないでください」
「調子に乗ってんじゃねえぞ！言わせておけばいい気に――」
「次は殺すぞ」
別人のようにトーンを落としたサラの言葉に、男達はそろってすくみ上がった。

サラが精霊使いであるのは疑いようがないだろう。この少女は何らかの精霊魔法――
少なくともバーゼルの呼び出す鋼鉄をやすやすと貫けるだけの何かを使役できるのだ。
自分達より強い精霊使いを圧倒し、なお人殺しに何のためらいも見せないサラに
どうしてこれ以上逆らうことができようか。
中指を真っ直ぐ天に向けた彼女の進む道を阻んだものは、そこにはいなかった。

夕暮れ。
町外れの獣道に、二人の少女の影が長く伸びる。

母であり師である家族の待つ家に向かって、傷だらけのアミィと無傷のサラが歩いていく。
会話はない。夕食の買い物袋は、全てサラが持っていた。

「……サラ」
アミィがおずおずと声をかけたが、サラは無言で歩き続けた。視線すら合わそうとしない。
「怒ってるかい？」
「うん」
感情を押し殺して普通に響く声。こういう声で話すサラは相当怒っていることを
十年来の親友であるアミィは良く知っていた。
「……ごめん。あれだけ言われたのに、さっそくケンカになって。しかも負けちゃって。
サラに人殺しさせちゃった……し。その……」
「別に気にしてないよ」
「そ、そうかい？」
サラの声は本当に何も気にしていないように聞こえる。
確かにアミィもサラが人殺しをしたことをうじうじ悩んでいるとは思っていなかった。
決して治安がいいとはいえない辺境に住む二人なのだ、自衛のための殺人は今回が始めてではないし、
見られてさえいなければ、精霊使いの力は法では裁けない。
あのガードマン達が騎士団に泣き付いたりでもしなければ、その辺りは大丈夫だろう。
問題はサラの言に反した愚行をどうやって許してもらうかだ。アミィはうつむいて続けた。
「……あのさ、晩ご飯抜き……三日くらいご飯抜きでいいから。
掃除も洗濯もあたしがやるから。その、そのさ、好きなだけ殴ってくれても我慢するから……」

「そんな趣味ないよ。何が言いたいの」
「え、えっとさ……何でもするから。我慢するから。……許して。嫌いになんないで」
「わかった」
「やっぱり……じゃ、じゃあさ、こうしよ――って、ええ！？」
あっさりと謝罪が受け入れられたことに拍子抜けし、アミィは思わず大声を上げる。

「どうかした？」
「え、あ、いや、許してくれるのかい？」
「うん」
「罰ゲームとか、ペナルティとか、廊下にバケツ持って立つとか、そういうのは？」
「お望みならやるけど」
「の、望んでない！　……本当にいいの？」
「反省してるならそれ以上は叱らないよ」
サラはこともなげに言う。夕日を浴びて赤く染まっていたのは、できのいい妹の、最大の好敵手の、十年来の親友のいつもの笑顔だった。
いくら彼氏を振ってもまったく寂しくない理由がわかった気がした。不思議とこみ上げてくる涙を、流れ落ちる前に拭う。

「さ、帰ろ？　早く手当てしないと、傷痕が残っちゃうかもよ。自慢のお肌が台無しだよ？」
「そ、それは困る」
いつの間にか開いた差を駆け足で埋めるアミィに苦笑いし、サラは姉の肩口のすり傷を一瞥して言った。
「少しは露出の少ない服にしたら？そしたら、こんなひどい怪我しなくても済んだのに」
「嫌だ。男なんて色気で引っかけるのが一番早いんだ」

「……昼間も言ったでしょ？　アミィに彼氏ができないのは、アミィの理想が高すぎるせいだよ」
「それは絶対にない」
アミィはきっぱりと言い放った。
「実際、私は見つけたんだぞ。あたしの理想――あたしより強くて、料理が上手で、顔が平均以上で、デブでなくて、
普段は優しいんだけど叱るべき時は叱ってくれる、そういう人をね」
「いつ見つけたの。そんな人がいるなら、その人にアタックかければいいじゃない」
「そいつは無理だ。彼氏にするにゃどうしても許せない点が一つあるんだよ」
「だから理想が高いって言うんだよ……で？その人の何が気に入らないの？」
サラの問いに答え、アミィは至極残念そうに笑う。
「……悔しいことにね、女なんだよ。そいつ」
アミィの眼前に、丸い目をぱちくりさせるサラがいた。

トイレのアミィさん

「はい、どうぞ」
そう言ってサラはカップに安物の紅茶を注ぐと、アミィの前に差し出した。
「ありがと。なーんか喉乾いちゃってさー」
アミィは嬉しそうに口をつける。白い着流しは彼女の寝間着だ。
サラも薄桃色のパジャマ姿で、お互い髪がかすかに湿っている。風呂上がりらしい。

喉を鳴らしてカップを傾けるアミィを一瞥し、サラは傍らの本に再び目を落とすが、
「お代わり」
そうはさせまいとばかりに空のカップを突き付けられた。
軽く眉間にしわを寄せるサラ。アミィのほうはにこにこと笑っている。
「どしたの？　早く注いでよ」
「……アミィ、寝る前にそんなに飲むと、夜中にトイレ行きたくなると思うんだけど」
「へーきへーき。大丈夫だから早くちょうだい」
「……」
この遠慮のない義姉に何を言っても無駄だと思ったのか、無言でポットに手を伸ばす。
それでも嫌味くらいは言いたくなるようで、サラはアミィのカップを手繰り寄せながら小さくつぶやいた。
「トイレ行くからって、私を起こすのはなしだからね」
「あたしゃ十七だよ？　トイレくらい一人で行けるって。……お、ありがとー」

「普通はね。でも、アミィだからなあ」
「なんだいそりゃ。――だいたい、サラの淹れるお茶が美味いからいけないんだ」
わざと音高く茶をすすり、アミィは笑った。
「こんだけ美味けりゃ、仮にあたしじゃなくても飲みたくなるさね」
「七割引きで売ってた処分品だよ、それ」
「サラが淹れたってのが問題なんだよ。
いいじゃんか、美味しい言われる分には気分いいだろ？　サラだって」
「どうかな。手間はかかるし、いいことないよ」
「いいからそういうことにしときなって。あたしが嬉しいならサラも嬉しいはずだ。決定」
「そんな無茶な」
「うるさいね、いいから注いでよ。お代わり」
「ちょっと、もう三杯目？」
姉妹同然に育った仲の二人だったから、こんな他愛のない話もそれなりに弾む。
二人の部屋からなかなか灯かりが消えないのもいつものことだ。
しかし、やがては二人も寝静まり、山の覇権が人間から獣へと移る闇夜がやってくる。

ふくろうの鳴き声がやけに大きく聞こえる、満月の夜のことだった。

「……」
ベッドの中で、アミィはぱちりとまぶたを開けた。
目の前には静かに寝息を立てるサラ。
そろそろ冷え込んできたので、今夜は一緒に寝たのだ。まだお袋は暖房を許してくれない。
「……」

妹弟子の寝顔を見つめる。幸せそうな顔だった。起こすのは気が引ける。
実際、普段だったら何がなんでも起こさなかっただろう。
だが、今回ばかりは起こさなければならない。事態は深刻だった。
「サラ、サラ。起きてよ」
「ぅん、う〜……」
アミィはゆさゆさとサラの肩を揺さぶり始めた。その手つきはかなり遠慮がなく
サラはあっという間に目覚めた。眠たげに目をこすり、恨みがましい視線をアミィに向けたが
月明かりに照らされた彼女の真剣な顔付きに、自らも表情を強張らせる。
「サラ、唐突だけど大事な話があるんだ」
「……どうしたの？」
「うん。言いにくいんだけど……落ち付いて聞いてくれな」
「何？」
「トイレ、行きたいんだけど」
場の空気が一瞬で凍り付く。閉め切られた部屋の中を、一陣の寒々しい風が吹き抜けたようにも感じられた。

ずぼ。

ふいにサラの両手の小指がアミィの耳の穴にうずまった。そしてぐりぐりと回り始める。
「ふあっ、さ、ささ、サラ、サラ、耳、くすぐった、耳、みみみ、耳やめて、耳はーぁぁはぁううっ」
「アミィ、私言ったよね。トイレが近くなるから、あんまり夜中にがぶ飲みするものじゃないって」
「いいい、言いましたっ」
「でも大丈夫だって言ったよね。トイレくらい一人で行けるとも言

ったよね。
　私のことは起こすなとも言っておいたはずだよね」
「言いましたっ、言いましぃぃ、はぁうっ、言いまし、ましたけどっ、それはぁぁぁ」
「言ったけど、それは？　何？」

ごち。

指が引き抜かれ、代わりに拳がアミィの頭に添えられた。
どことなく冷めた無表情のサラの拳は、中指の第二関節だけが不自然に突き出ている。
誰もが一度は食らったことがあるだろう『殴られた時もっとも痛い拳』が、アミィのこめかみに添えられているのだ。
この状況下で、先ほどのようにぐりぐりとやられてしまえば。いよいよ歯の根が噛み合わなくなるアミィ。
「……何も震えることないよ。トイレ行きたいんでしょ？　早く行ってきたら？」
「あ、あのね、サラ……そ、そのー、夜中だよね、暗いよね」
「そうだね」
「それで、あれだよ、ほら。何と言うか、人間は真っ暗闇を本能的に恐れるもんでね」
「らしいね」
「だからさ、えっと、えーと……暗いとさ、そこから何かヤバいもんが出てきそうじゃん？」
「そうかもね」
「つまるとこ、ほら、一人じゃ怖いんだよね、トイレ行くの」
「だから？」
「そのー……一緒に来てください。お願いします」
「覚悟はいい？」
「ご、ごめん！ごめんってば！許して！やめ、ぐりぐりはやめて！

お願い！おねが――」

絶叫。

「……自分がトイレに入ってる横に誰かがいるって、気まずくない？」

「そんなこと言ってられないって」

ランタンの炎を見つめていたサラが、寄りかかったドアの向こうに話しかけた。返ってきた声はアミィのもの。

「こんな暗いのに一人でトイレなんて行けっこないじゃんか。

サラもお袋も、なんで平気なんだよ」

「私に言わせれば、その年になって一人で行けない方が不思議だよ。

何がそんなに怖いの？」

「何って、何か出そうじゃん。いろいろと怖いものが肩でも組んで練り歩いてるように思えるだろ」

「……何のために修行してきた武術なの？　他人のトイレ覗いて喜ぶ変態さんなんか

何人束になっても、アミィの敵じゃないじゃない」

「そう言う意味じゃないって！　もっとこう、殴って倒せない怖いもののことだよ！

オバケとか、妖怪とか、幽霊とか、化け物とか！」

「はいはい、静かにしてないとお師さんに怒鳴られるよ」

サラはトイレから聞こえてくる必死な叫びを軽く流し、

おもちゃ屋で駄々をこねる他人の子供を見るような、そんな仕方なさそうな笑顔を浮かべた。

「要するに幽霊が怖いんだね、アミィは。子供だなあ」

「……サラのほうが年下じゃないさ」

「私は精神年齢のことを言ってるの。ほら、早く済ませちゃいなよ。

寒いから」
そう言って後ろ頭でドアを小突くサラ。アミィは何も言ってこなかった。

「……というようなことがあったと言うのに。それも昨日に」
サラは腕組みをしてベッドに座っていた。
向かいのベッドではアミィがあろうことか、ぬるめに冷ましたお茶をがぶ飲みしている。
「何でアミィはそんなに過剰な水分補給をしちゃうかな？」
「うるさいねえ。決まってるじゃんか」
三杯目のカップを干したアミィは、濡れた口元を拭いながらサラをにらむ。
「昨日のことはありがたいけどね、『子供だなあ』はちょっと許せないものがあるだろ。
あたしゃあんたの姉弟子なんだから」
「……怒ってたなら、あやまるけど」
「あやまられてもしょうがない。っつーわけで、あたしゃサラがいなくても
夜中にトイレに行けるということを、今夜証明してみせるって言ってんのさ」
「なるほど。でも、別に本当に用足ししなくたっていいと思うけどな」
「飲んじゃったもんしょうがないだろ。見てなよ、あたしはあんたより年上なんだから」
「……結局、私は起きてなきゃ駄目なんだね」
「当たり前さ、口だけじゃ信じないだろ」
自分で注いだ四杯目のお茶を飲み終え、アミィは「ごちそうさま」をつぶやきながら立ち上がった。

「それじゃ、行ってくる。ランタン貸して」
サラがもらした大きなため息にすら気付かない真剣さで、アミィはマッチ箱に手を伸ばした。

思ったよりもぼんやりとしたランタンの灯かりを頼りに、アミィは一階への階段を降りていった。
一歩一歩確実に、そろりそろりと進んでいく。
ホラー映画の一幕のようだが、別に彼女はゾンビやエイリアンを警戒しているのではなく、トイレに行こうとしているだけだ。

「二階にもトイレがあればなあ……」
ひんやりした空気を意識する度、気弱な独り言が口をついた。
一階の廊下もやはり暗い。同じランタンのはずなのに、灯かりが昨日より弱い気がする。
やはりサラがいるといないとでは大違いだ。
「……」
今からでもサラのところに戻って、ついてきてもらおうか。
ちょっと耳に指を突っ込まれて悶絶させられるかも知れないが、ちょっとこめかみに拳を押し付けられてぐりぐりされるかも知れないが、
こうやって得体の知れない恐怖と戦うよりは、そっちのほうが
「……いや、いかん！あたしはサラを見返すんだ！」
大きくかぶりを振って、アミィは歩く速度を上げた。
無意識に呼吸は止まっていた。頻繁に辺りを見渡す。何かがいる気配はしない。暗いが、それだけだ。
「なんだ……大丈夫じゃんか」
アミィは力なく笑い、強張っていた肩の力を抜く。
母の部屋の前を通り過ぎ、狭い廊下を曲がると、突き当たりにトイ

レのドアが見えた。
何のことはない。ここまでくれば、あとは行って帰ってくるだけだ。
たったこれだけのことに、今までびくびくしていた自分が馬鹿みたいではないか。
安堵の息を漏らしながら一歩を踏み出し、廊下にあるガラス張りの窓の前を通過してトイレへ。

そんな彼女と、窓を挟んで並走する影があった。

「……」
アミィの顔から表情が消えた。いつも血色のいい肌がみるみる青ざめていく。
ごくりと唾を飲み込み、アミィはちらりと眼球だけを動かして窓を見た。全てが見間違いであることを信じて。
はたして、その者はそこにいた。
こちらを睨んでいるのは、真っ白な着物を着た若い女性。硬そうな長髪をわずかに乱したその女は
この世の生物では有り得ない、半透明な体をしている。後ろの景色が透けて見えた。

絶叫。

窓のある壁を背にしてしゃがみ込み、荒い息を整えようとするが、うまくいかない。
「ひーっ、ひーっ、ひーっ……」
出た。間違いなく出た。オバケ。妖怪。幽霊。化け物。とりあえず精霊ではないと思う。アミィは頭を抱えて震える。
出るとは思っていたが、まさか本当に出るとは。
どうしてサラや母は気付かないのだろうか。自分は霊感とやらが強

いのか。
とにかく、何とかしないと。だが、どうすれば。どうすれば解決できるのだろうか。知らず目に涙がたまっていく。
「……アミィ？　大丈夫？」
その声にびくりと肩をすくめたアミィだったが、それは聞き慣れた親友の声だった。
一応は何者かの襲撃を警戒してか愛用の木刀を携え、窓の外を気にしながら歩み寄ってきたサラを
アミィは絞め殺さんばかりの勢いで組み伏せる。
「サラぁぁぁぁ！！　出た！出た！出た！　助けて！助けてぇ！」
「げふっ！？　……お、落ち付いて、アミィ。そんな大声出したらお師さんに怒鳴られるよ」
急き込みながら身を起こしたサラの言葉を聞くと、アミィは泣き顔のままではあるがおとなしくなった。
彼女が母をどれだけ恐ろしい存在だと認知しているかが知れようというものだ。
もっとも、アミィの母は一度寝たら起きないタイプの人間だが。

「で、どうしたの？　まさか本当に幽霊が出たとか？」
「その通りだよ、窓の外！見てみておくれよ！」
小声で叫んだ、と称するのが相応しいような器用な主張だった。
アミィの体をどかすと、サラは腰をかがめて静かに窓へと近寄り始める。
「……」
壁に背中をつけ、そっと外の様子をうかがうサラ。
しかし、アミィの言う幽霊らしきものは見当たらない。
アミィは殴って解決できないものに対しては驚くほど臆病であることを考慮しても、
外には幽霊と見間違えるようなものは何一つなかった。いつものように月明かりに照らされる山林があるだけだ。

「アミィ、何もないよ？」
「嘘だって！　いたんだよ、確かに！　体が薄く透けた、白い着物着た髪の長い不気味な女が立ってたんだって！」
「……体が、薄く透けた？」
サラは窓に視線を移した。アミィが放り出したものの
奇跡的に壊れなかったランタンが照らす廊下は、少なくとも夜闇よりは明るい。
その明暗の差が、サラの丸い瞳をはっきりとガラスに映り込ませている。その向こうの景色は、薄く透けて見えた。
「……白い着物の？髪の長い？女？」
次いでサラは腰を抜かしてへたり込むアミィの姿を見た。
今の格好は、彼女が寝間着に使っている肌触りのいい浴衣。合わせを逆にすれば死装束に使えそうな、白無垢の。
サラ自身が切ってやっている彼女の髪は、尻に触れるほど長い。
「アミィ」
「なんだい？」
「大丈夫、怖くないのは保証するからね。だから、窓見てみなよ」
「え……」
「大丈夫だから。それでもうだうだ言ってるなら、怒るからね」
重ねて、アミィは殴って解決できないものには弱い。サラはその代名詞だった。
サラが怒れば幽霊や母以上に恐ろしいことを十二分に理解しているアミィは、幽霊の恐怖を呑み込んでそれに従う。
もはや警戒の欠片も見せずに窓の正面に立つサラに並び、アミィはおそるおそる窓を覗き込んで、
「……あ」
幽霊の正体を知った。
アミィはうつ伏せにベッドに倒れ込んだ。その顔は、酒でも飲んだ

ように紅潮している。
その脇にサラが腰かけ、ぽむぽむと姉の頭を叩いた。
「ガラスに映り込んだ自分の姿を、幽霊だって勘違いするとはね」
「笑えよ。派手に笑い転げるがいいさ」
「あまりに傑作過ぎて笑えないよ。もう少し加減してボケなきゃ」
「……うるさいね」
枕に顔をうずめて動かなくなったアミィを見てか、サラの手つきが柔らかなものに変わる。その笑顔も。
「だから暗いのは嫌なんだ……もう夜中に水飲むのやめるよ」
「最初からそうすればいいんだよ。そしたら、私の睡眠時間も減らずに済むんだから」
「そんなに寝たいなら、あたしのことなんてほっといて寝ればいいじゃないか」
「……アミィ、せっかくついて行ってあげてる人に言う台詞がそれ？」
「あ……いや、ごめん」
声のトーンが低くなったことを感じ、慌てて顔を上げるアミィだったが
悪い予想に反してサラは微笑んでいた。剣だこのできた硬い手で、それでも優しくアミィの長髪をとかしている。
「いいよ。前に言ってたよね、ついて来てくれるのはありがたいって」
「ん、ああ」
「なら別に構わないよ。嬉しく思ってくれて、感謝してくれてるならね」
「……優しいねえ、あんたは」
寄り添うように毛布に潜り込んだサラを一瞥し、あきれたようにアミィは言う。
が、サラはきょとんとしていた。もっとも、楽しそうな笑みをこらえきれていないから

まだ何か自分をからかうつもりでいるのだろう。アミィは少しだけ眉をしかめる。
「私が、優しい？　何で？」
「何でって。あたしが嬉しく思うだけでついて来てくれるだろ。あたしが言うのも何だけどさ、サラって優しすぎないかい？」
「アミィが嬉しいことなら、私にとっても嬉しいことなんでしょ？」
アミィ自身がすっかり忘れていた、前の夜の何気ない一言を口にし、サラは笑った。
「なら、ついて行くのは当然じゃない」
返す言葉はなかった。赤面したままアミィはころりと仰向けになり、目をつむる。
「……もう寝るよ。おやすみ」
「ん、おやすみ」
隣でサラが一度体を起こし、ランタンの炎を消す気配がした。
目を開けると部屋はすでに何も見えなくなっていた。ただ、すぐそこで横になっているサラの寝息は聞こえる。
アミィはサラの手を握った。毛布の中はまだ冷たかったが、もうじき暖かくなるだろう。

ぬくもりをあげたくて

「ノブナガがサンダルを履くと、サンダルは生暖かかった。
そこでノブナガはトーキチローに向かって『貴様、主人のサンダルに腰を下ろしておったな！』と一喝した」
夕食後のリビングでは、サラがアミィに本を読んで聞かせていた。
アミィは文盲だ。なぜか共通語の読み書きができない。
綾子が彼女に字を教え始めたのは三歳の頃からだが、
今でもアミィが理解できるのは単語、あるいは短い文章のみである。
本を読もうと思ったならサラを頼るしかない。
何を思ったのか、今回アミィがチョイスしたのは東方の歴史書だった。
「するとトーキチローは『いえ王様、これは腰かけていたのではありません。
寒夜ですゆえに、王様が風邪などにならないよう、懐で温めていたのでございます』と言った」
「ふむ」
「ノブナガが『ならばその証拠を見せろ』と言うと、トーキチローはばっと着物の前をはだけてみせた。
そこは砂だらけであった。感心したノブナガは、トーキチローをサンダル取りの頭に取り立てたという。
……さて、今日はこのくらいかな」
サラは本に銀板のしおりを挟んで閉じ、大きく伸びをした。
「もう終わりかい？」と不満そうな顔をするアミィだったが「長いんだから疲れるんだよ」と答えられれば返す言葉がない。
「さ、今日はもう寝ようよ。明日の訓練はお師さん退治だよ」
「あれは地獄だ。どうして二人がかりなのに倒せないんだろうねえ」

シングルベッドにもぞもぞと潜り込むサラとアミィ。寒さへの対処だ。
それぞれ自分のベッドはあるものの、冬の夜ともなれば山の気温は相当低くなる。
しかし綾子はまだ部屋に暖房器具を入れることを許してくれないのだった。精神修行、と言っている。
「でも、二人で寝ると狭いね」
「一人用だからねえ……」
居心地悪そうに寝返りを打ったサラを背に、アミィは一人物思いにふけり始めた。

「サラー、あがったよ」
「んー」
アミィが長い髪をタオルでこすりながら部屋に入れば、
入れ替わりにサラがアヒルのおもちゃを手に階段を降りていった。
二人が知るもっとも厳しい訓練『お師さん退治』を終えたアミィとサラはくたくたに疲れ切り、
いつもなら起きている時間ではあるが、眠る準備を始めている。
「……さて、作戦開始だ」
サラの背中を見送ったアミィは、そのままサラのベッドに横になると毛布を羽織った。

昨日読んでもらった本には、懐でサンダルを温めて王様に気に入られた男の話があった。
ならば自分もサラのベッドを体で温めておけば、サラに気に入られるのではないだろうか。
サラが自分と一緒に寝るのは、寒いからだ。寝床が狭くなることは

嫌がっている。きっと喜んでくれるだろう。
冷たいベッドは容赦なくアミィの体温を奪っていたが、妄想に夢中のアミィにはさしたる障害ではない。

「ちょっと、アミィ！何私のベッドで寝てるの！？」
「違うって、サラ。これはサラのベッドを温めてあげてただけだよ」
「え、そうだったの？　……あ、ありがとう」
「お礼なんていいって、ほら、寝な。疲れただろ？」
「うん。ありがと、あったかいよ。……そうだ、今度お師さんに内緒でケーキでも焼いてあげようか？」
「え！？　い、いや、ダメだ！そんなことしたら怒られちゃうだろ、勝手におやつ作ったら！」
「えー、いいじゃない、バレなければ。アミィだって食べたいでしょ？ケーキ」
「そ、そりゃあ……いやいやいや、やっぱりダメだって！　怒られるってば」
「ふーん……あ、そだ。それならケーキよりもいいことしてあげようか？」
「いいこと？　――って、サラ！？何やって……あ……」
「ほら、気持ちいいでしょ？　もってしてあげるからね……」
「だ、ダメ……ダメだって、それもダメだからぁ……」
「もう、ワガママなんだから。私はアミィにお礼がしたいんだから。どっちか選びなさい」
「……それなら、その」
「どっち？」
「……選べって言うなら……後のほうが。後者のほうがいいな……」
「ん、わかった。それじゃアミィ、おとなしくしててね」
「うん……あう、あ、ちょ、ま、ふああ……」

夢というのは眠りが浅ければ浅いほど、わずかに現実感を残し、な

おかつ暴走する。
思わず自主規制してしまうほどの過激な快楽に頬を緩ませ、アミィはぐうぐうと眠りこけてしまった。

「んあ」
アミィはふいに目を開けた。暖かいサラのベッドの中で、素敵すぎる夢からの目覚めを悔しがる。
そしてしばし暗闇を見つめ、自分が何をしようとしていたのかを思い出し、慌てて飛び起きた。
しまった、いつの間にか本気で眠ってしまっていた。
「やっばー……サラ、サラ、サラは？」
いつもならば同じベッドで寝ているはずのサラの姿がない。
もしやと闇に目をこらすと、予想通りそこには
自分のベッドの中で静かに寝息を立てるサラがいた。何故に違うベッドを使っているのか。
「さ、サラ、起きてよ！」
「んー……？　何、アミィ……またトイレ？」
「違うって！何であたしのベッドで寝てるのさ！」
「何でって……アミィが私のベッドで寝てたから」
「違う！そうじゃなくて！いや、そうなんだけどそうじゃなくて！」
作戦の失敗を悟れず混乱し、言動が支離滅裂になるアミィに顔をしかめ
サラは名残惜しそうに毛布から這い出て小さく身震いした。
「何で一緒に寝てないのさ！？寒いでしょうが！」
「――だって、アミィがそうしてくれって言ったんでしょ。私はその通りにしたんだよ」
サラが語るに、風呂からあがって部屋に入ると、アミィはすでに寝

ていたと言う。
それ自体は別におかしいことでも何でもなく、サラはアミィを起こさないよう灯かりを消し
いつものように互いの体を湯たんぽ代わりに眠ろうとしたが、突如としてアミィが叫んだのだ。
「え！？　い、いや、ダメだ！んにゃむ……」
「は……？　あ、アミィ、ダメって何が……」
戸惑いながらもサラはベッドに入ろうとしたが、
「ふにゃぁ……いやいやいや、やっぱりダメだって！　怒られるってば」
「だ、誰に？」
アミィが横になったまま大声でそう叫ぶので、サラは仕方なくアミィのベッドで寝ようとした。しかし、
「むにゃ……――って、サラ！？何やって……」
「な、何って、一緒に寝たらダメなんでしょ？　アミィのベッドで寝ようと思うんだけど」
「だ、ダメ……ダメだって、それもダメだからぁ……」
どことなく甘ったるい声でそう頼まれてしまったのである。これにはサラも困惑するしかない。
「わ、私に寝るなって言うの？　どっちか使わせてよ、ベッド」
「……それなら、その」
「どっち？」
「……選べって言うなら……後のほうが。後者のほうがいいな……」
「アミィのベッドを使っていいんだね？」
「うん……あう、あ、ちょ、ま、ふああ……」
「はぁ……？」

「最後のほうは何言ってるのかわからなかったけど、
とにかく『うん』って言ったからアミィのベッドで寝たんだよ。

……どうかした？」
アミィは夜中でもそれとわかるほど真っ赤になっていた。
完全に覚えている。サラの話した台詞は、自分が夢の中でサラに言っていたことの一部だ。
「まさか寝言になってたとは……」
「寝言だったの？　どんな夢見てたの」
「あ、いや、それは――」
言えるものか。言えば間違いなくサラは口を聞いてくれなくなる。
とにかく作戦は大失敗だ。今『ベッド温めておいたから、こっちで寝なよ』と言って何になるだろう。
いい作戦だと思ったのに、どうしてこんなことに。
「上手くいくと思ったのにぃ……ううううううう」
「あのー、アミィ？　アミィちゃん？　アマリネさん？」
「うっさいなあ、寝よ！もう寝よ！ほら、サラもこっちおいで！」
涙目でこちらをにらむアミィを、何がなんだかわからない様子で見つめるサラであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1735b/

サラとアミィはかく語りき

2010年10月10日07時36分発行